

## 友禅

いくつもの工程を経て、布に模様染まります

友禅は、江戸時代に京都で活躍した扇絵師の宮崎友禅齋みやざきゆうぜんさいによって考案されたとされる染色の技法です。友禅齋は、後に加賀藩（現在の石川県などを治めた藩）に招かれて当地に友禅染を広めたと伝えられています。「京友禅」と「加賀友禅」とでは、模様や色づかいなど、作風にそれぞれ特徴があります。そのほか、江戸や尾張に広まったものが、それぞれ「東京手描き友禅」、「名古屋友禅」として今も受け継がれています。

伝統的な手描き友禅（本友禅）の大まかな工程では、まず、図案家の描いた模様を元に、絹の白生地に「青花液あおばなえき」で下絵を描きます。かつては、ツクサ（別名：青花）の一種であるオオボウシバナの花びらに含まれるアントシアニンという色素成分を抽出した「本青花」が使われていましたが、現在は、大量生産が可能でより安価であるなどの理由から、でんぷんとヨウ素との反応を利用して化学的に合成した「化学青花」が主として使われています。下絵は、「本青花」の場合は水洗いによって、また「化学青花」の場合は加熱などによって、後から消すことができます。

次に、下絵の線に沿って、でんぷん糊を糸のように細く置いていきます。これは「糸目糊」と呼ばれ、彩色のときに模様の外に染料がにじみ出るのを防ぐ役割をします。この「糸目糊」の跡が白生地そのまま残って美しい輪郭をなすのが、友禅染の特徴の一つともいえます。

その後、「糸目糊」で囲まれた模様の部分を、筆や刷毛はけを使ってそれぞれの色に染めていきます。彩色には、かつては植物（アカネ、アイ、ウコン、ベニバナなど）や動物（カイガラムシなど）から抽出した染料が使われていましたが、明治時代に入って

からは、染めやすさ、色の豊富さ、染色の安定性などの観点から、主として合成染料が使われるようになりました。

模様の部分を彩色したら、いったん生地を蒸します。蒸気を当てて熱を加えることによって、染料が繊維の内部まで浸透して、しっかりと定着するのです。

次に、彩色した模様全体を覆うようにでんぷん糊を置きます。これは「伏せ糊」と呼ばれ、刷毛を使って生地全体の地の色を染めるときに、模様の部分に染料が付着するのを防ぐ役割をします。

地色を染めた後に再び蒸し、それから青花液、糊、余分な染料などを水で洗い流します。この作業は、かつては自然の川で行われており、澄んだ川の流れに色とりどりの反物が踊る光景が「友禅流し」と呼ばれ親しまれていました。現在は、合成染料などによって河川が汚染されることや、逆に河川の汚れが反物に付着することなどから、排水処理設備の整った屋内で行われるのが一般的です。

そして最後に、生地を乾かし、蒸気を当ててシワなどを伸ばして形を整えたら完成です。

最近では、作業性などを考慮して、でんぷん糊の代わりに水に溶けないゴム糊を使って「糸目糊」を置き、次にでんぷん糊を使って「伏せ糊」を置いて、先に地色を染めてから、「伏せ糊」を水で洗い落として模様を彩色し、最後に薬品を使って「糸目糊」を除去する方法も用いられています。

また、「手描き友禅」のほかに、形紙（型紙）を用いて染める「型染め友禅」も明治時代に考案されました。時代とともに変化をしつつ、友禅の伝統はこれからも受け継がれていくことでしょう。（平成22年10月）

協力：京都手描友禅協同組合 <http://www.yuzen.or.jp/>